

歴史から学ぶ、未来を見つめる ～エジンバラ大学滞在報告～

見上公一

東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 科学技術インタープリター養成部門

歴史の街エジンバラ

この 4 月に東京に戻るまで、私はエジンバラ大学で研究を行っていました。エジンバラは英国北部に位置するスコットランドの首都で、ロンドンから電車で約 4 時間半の距離にあります。街の中心に位置するウェーバリー (Waverly) 駅の北側は新市街 (New Town)、南側は旧市街 (Old Town) と呼ばれ、どちらもユネスコの世界遺産に登録されており、英国の中でも有数の観光地として知られる街です。街のシンボルとも言えるのは、崖の上にそびえ立つエジンバラ城で、そこからホリールド宮殿まで続くロイヤルマイルと呼ばれる一本道では、年間を通じて多くの観光客の姿が見られます。8 月に開催されるフリンジ (Fringe) と呼ばれるフェスティバルでは大道芸などでも賑わうこの道ですが、ちょっと歩いてみると哲学者デイヴィッド・ヒューム (David Hume) や、経済学者アダム・スミス (Adam Smith) の銅像を見つけることができます。また、先ほど述べたウェーバリー駅は詩人ウォルター・スコット (Walter Scott) の同名の歴史小説にその名を由来しますし、世界を代表する推理小説「シャーロック・ホームズ」シリーズの作者アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle) が生まれたのもこのエジンバラで、長きにわたり思想や文学の発展に関わってきた街と行うことができます。そして、近年では J.K.ローリング (J.K. Rowling) がファンタジー小説「ハリーポッター」シリーズの第 1 巻「ハリーポッターと賢者の石」を執筆した場所としても知られています。



そんな街に 1583 年に設立されたのがエジンバラ大学です。大学は街のどこにあるのかという質問をたまに受けることがあります。エジンバラ大学の建物は街中に存在しており、一カ所にまとまっていないため、実は「ここ」と言うことは難しいのです。大学図書館があるジョージ・スクエア (George Square) や、大講堂のあるブリスト・スクエア (Bristo Square)、そして、美しい中世の建築物であり現在は法学部があるオールド・カレッジ (Old College) の周辺のことをエジンバラ大学のメインキャンパスと認識する人が多いようですが、多くの実験室はキングス・ビルディングス (King's Buildings) と呼ばれるキャンパスにありますし、医学部はリトル・フランス (Little France) という街から少し離れた場所に大学病院と併設されてい

ます。また、クローン羊ドリーで有名なロズリン研究所 (Roslin Institute) は、イースター・ブッシュ・キャンパス (Easter Bush Campus) という郊外のキャンパスに含まれています。街の規模としては、同じスコットランドの都市グラスゴー (Glasgow) には及ばないものの、エジンバラはスコットランド議会を有する地方政治の中心地であり、学生や研究者、そして、その他の大学関係者が多く住むことから、とても国際的な街です。

二つのイベント

質の高い研究にふれるということ以外でも、エジンバラ大学で過ごした時間はとても充実したものでした。特に印象的だったのは、エジンバラ滞在期間中に偶然にも立ち会うことができた下記の二つのイベントです。

1. スコットランド独立を問う住民投票

まず一つ目はスコットランド独立の住民投票です。英国はもともとイングランド・スコットランド・ウェールズ・北アイルランドの4つの異なる国から成り立っています。その地理的な環境から、歴史的にも大陸や北欧との関係に違いがあり、言語や宗教だけではなく、経済や政治のあり方にもその違いを見つけることができます。例えばイングランドとスコットランドでは義務教育が始まるタイミングが違います。イングランドは4歳から義務教育が始まるのに対して、スコットランドは5歳からです。また、大学もイングランドでは3年間で終わるのが一般的ですが、スコットランドは4年となっています。他にも、イングランドやウェールズでは日曜に店を開くことが長い間禁じられており、現在も営業時間について制限が設けられているのに対し、スコットランドでは日曜に店を開くことに何も問題がないといった違いもあります。このような背景から、イングランドを除いた3国にはある程度の自治権が与えられてきました。スコットランドに議会が設置されたのは1999年です。各国の議会は、それぞれの文化や理念を反映した独自の政策を進める権利を持っていますが、それはビックベンで知られるウェストミンスターの国会が認める範囲であり、完全な自治とは言えません。ウェールズや北アイルランドにも独立を求める声はありますが、住民投票の実施に至ったのは、経済的な基盤がある程度安定しているスコットランドだけでした。



住民投票は2014年9月18日に行われましたが、スコットランド国民党を中心とした独立を求める「Yes Scotland」キャンペーンと、英国に残ることを目指した「Better Together」キャンペーンは最後まで予想がつかない状況の中、精力的に活動を展開していました。結果は、当時のデイヴィッド・キャメロン (David Cameron) 英国首相が更なる自治権の拡大を約束したこともあり、独立反対派が勝利し、

スコットランドは英国に残ることになりました。一連の流れを間近で見ると、本当に驚かされたのは「スコットランド人である」というアイデンティティーの強さと、人々の興味関心の

高さでした。スコットランド人としてスコットランドのための政治が行われることを求めるといふ声は、「Yes Scotland」と「Better Together」の両キャンペーンに共通していたように思います。また、街中を走る車には YES か NO のどちらかが書かれたシールが貼られていることがほとんどでしたし、同様のシールは店先や一般住宅の窓にも貼られていました。そして、この住民投票はスコットランドの未来を決めるということで、まだ普通選挙の投票が認められていない16歳と17歳の若者にも投票権が与えられたこともあり、各キャンペーンの活動に積極的に参加する若者の姿が多く見受けられました。

独立はしないが自治権の拡大を進めるという決着は、独立賛成派と反対派どちらの主張も兼ね備えた、ある意味では「中道」と言える結果だったように私には見えましたし、住民投票が実施された政治的な背景から考えると最善の結果だっただろうと評価する人も多くいましたが、投票前にどちらを支援した人も白黒つかない曖昧な結果をうまく消化できずにいるようにも感じられました。また、その後英国で EU 離脱を問う国民投票が実施され、EU を脱退することが決まったことによって、現在スコットランドでは二度目の住民投票を求める声が強まっています。今後どのような展開になるか予想することは難しいですが、スコットランド、そして、英国の歴史に残る一連の政治的なイベントを現地で見ることが出来たことは、本当に貴重な経験だったと思います。

2. サイエンス・スタディーズ・ユニット 50 周年

もう一つは、サイエンス・スタディーズ・ユニット (Science Studies Unit、以下 SSU) と呼ばれる組織の創設 50 周年記念イベントです。SSU は 1966 年に物理学者デイヴィッド・エッジ (David Edge) が中心となりエジンバラ大学に設立されました。その目的は「科学と文化をつなぐ」ことであり、主に理系の大学生に対する教育をその役割としていましたが、バリー・バーンズ (Barry Burns) やデイヴィッド・ブルア (David Bloor) という「エジンバラ学派」とも呼ばれる科学知識の社会学 (Sociology of Scientific Knowledge, SSK) という大きな研究の流れを作り出した研究者たち、そして、名著として現在も広く読まれている「リヴァイアサンと空気ポンプ」をケンブリッジ大学のサイモン・シャッフアー (Simon Schaffer) とともに執筆したスティーヴン・シェイピン (Steven Shapin) やジョン・ヘンリー (John Henry) といった科学史家をその主要メンバーとしており、研究面でも多くの成果を残しています。また、SSU では、これまで科学技術社会論で活躍する多くの研究者がトレーニングを受けています。いわゆる「欠如モデル」を批判し、市民が持つ現場知の重要性を議論してきたブライアン・ウィン (Brian Wynne) や、素粒子物理学の社会的な研究で知られるアンドリュー・ピカリング (Andrew Pickering)、そして、金融市場の形成メカニズムに関する研究で脚光を浴びているドナルド・マッケンジー (Donald MacKenzie) らは、この SSU で PhD を取得しています。さらに、デイヴィッド・エッジがサセックス大学の科学政策研究ユニット (Science Policy Research Unit, SPRU) に当時在籍していたロイ・マクレオド (Roy McLeod) とともに 1971 年に創刊した「Social Studies of Science」という学術誌は、現在も科学技術社会論 (Science and Technology Studies, STS) における最も重要な学術誌の一つとして知られています。このように、SSU は科学技術社会論の発展に多大な貢献をしてきた組織です。

そんな SSU ですが、2008 年にエジンバラ大学のほかの研究グループと合併する形で Science, Technology and Innovation Studies (STIS) として再編成されています。エジンバラ大学には、1980 年代に情報通信技術に焦点を当てた研究組織 Research Centre for Social Sciences が設立されたほか、日本の政府や企業がその研究活動に関わっていた Japan-European Technology Studies も組織され、ロビン・ウィリアムス (Robin Williams) が中心となって Institute for Study of Science, Technology and Innovation (ISSTI) と呼ばれる研究ネットワークが形成されました。また、2000 年代に入り、ゲノム科学の発展とその社会的影響について研究を行う Centre for Social and Economic Research on Innovation in Genomics (Innogen) という研究グループが英国の研究支援機関 Economic and Social Research Council (ESRC) により組織され、Innogen を含めて国内 4 カ所に設立された同様の研究グループが形成する ESRC Genomics Network と社会との対話を促進するための組織として ESRC Genomic Forum がエジンバラ大学内に設立されていました。時代の要請に応え、科学だけでなく技術や医療、そして、イノベーションを研究対象とする研究者たちが共に教育・研究活動に取り組む基盤として、STIS は位置づけられています。私が研究を行っていたのもこの STIS で、参加していた「Making Genomic Medicine」というプロジェクトは、SSU のメンバーだった医学史家スティーブ・スターディー (Steve Sturdy) が、1960 年代以降にゲノム医療の礎が形成されてきた歴史的経緯を明らかにすることを目指して立ち上げた、組織の歴史を反映したまさにエジンバラ大学らしいプロジェクトでした。



2016 年 6 月に開催された SSU50 周年記念イベントでは、表舞台から既に引退をしているブルアやバーズ、ヘンリーらに加えて、関係者として招待されたウェンディ・フォークナー (Wendy Faulkner) やアン・カー (Anne Kerr)、ウィン、ピカリング、マッケンジーらの多くの研究者が SSU の思い出を語っていました。また、外部からの視点として、当時の状況を知る英国カーディフ大学のハリー・コリンズ (Harry Collins) の話も興味深いものでした。SSU に対する思い入れはそれぞれのものでしたが、「Science and Technology Studies (STS)」という呼称がまだ存在しない時代から、一つの学問の流れを築き、今も高く評価される貴重な研究成果を生み出してきた先人たちに、改めて敬意を抱いたと同時に、自分も一人の研究者として、次の世代に誇れるものを残していきたいという決意を新たにしました。私だけではなく、現在 STIS に所属する多くの若手研究者たちも同じように感じていたようで、ヘルガ・ノヴォトニー (Helga Nowotny) とブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) を招いて同年 11 月にイベントの一環として開催された UK Association for Studies in Innovation, Science and Technology (AsSIST-UK) の会議で力が入った議論が行われたのがとても印象的でした。

未来に向けて

「現在」は「過去」にあった様々な活動の結果として存在しているわけですが、その歴史は色々な視点から語ることができます。そして歴史をどのように理解するのかによって、現状をどう捉えるのかも異なってくるはずです。ここでご紹介させていただいた私が体験した2つのイベントは、どちらも「過去」と「現在」を結ぶもので、これからどのような「未来」を求めていくべきなのかについて考える貴重なきっかけを提供してくれました。もちろん、このようなイベントがあったことは映像や文面で知ることができますが、その場に身をおいて、人々の生の声を聞いて、そして、その雰囲気を感じたことによって、そのインパクトは格段に強いものとなりました。エジンバラに滞在する間に偶然にもこのようなイベントに立ち会うことができた貴重な経験を忘れることなく、今後の教育・研究活動に活かしていきたいと思います。また、これまでに海外で生活したことのない家族が今回エジンバラと一緒に来てくれたことは本当に感謝しています。そして、エジンバラでの経験を子供たちが自分の成長にどのように活かしてくれるのか、その意味でも「未来」を楽しみにしています。

ⁱ イベントの詳細はSSU50 ウェブページ (<http://www.stis.ed.ac.uk/ssu50>) からご覧頂けます。